

時間認知を反映する形容詞

—形容詞の局面解釈をめぐる—¹

仲本康一郎

京都大学

e-mail: Koichiro.Nakamoto@ma2.seikyoku.ne.jp

これまでの語彙意味論の研究で、動詞については、その項構造やイベント構造の研究をとおりかなりきめの細かい分類が可能になった。これに対し、形容詞については、まだあまり研究が進んでいないのではないだろうか。² 本稿は、日本語の形容詞³から、時間的な認知を反映する語彙のクラスを観察・記述し、人間の「時間認知」の傾向について議論する。また、形容詞一般に適用可能な「局面解釈」という語用論的な解釈の傾向について考察する。⁴

1. 「局面形容詞」とは何か？

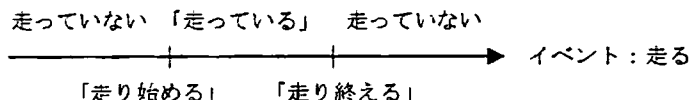
1.1. 「局面」とは何か？

「局面 (phase)」という概念は、一般に、以下のように定義される (Comrie 1976)。具体的な局面としては、これまで、動詞に関して、「開始」「途中」「終了」のほかに「変化直後 (just)」「変化直前 (almost)」など、いろいろな局面が提案されてきた。

- (1) 局面：ある事態 (状態やイベント) が、何らかのより大きなイベントのなかの一部として位置づけられるとき、その事態をイベントの「局面」という

動詞は、一般に、全体でひとつのまとまったイベントを表わすが、補助動詞を付加することによってイベントの一局面的を取り立てることができる (寺村 1991 他)。例えば、「走る」という動詞は、(2) のような局面が考えられる。(3) は、これらを時間軸に沿って、図示したものであり、上の方に分割された状態を、下の方に取り立てられたイベントを示している。

- (2) a. 起動相：馬が走り始める b. 進行相：馬が走っている
c. 終結相：馬が走り終える
(3) 動詞の局面⁵：



¹ 本論文は、関西言語学会第 23 回大会で発表したもの (1998b) に加筆訂正したものである。

² 筆者は、以前「力学形容詞」というカテゴリーの存在を主張し、その特徴的な項構造や格パターン (= 構文) について考察した (仲本 1999)。

³ 本稿では、「形容詞」を広く意味的に「属性」や「状態」を表わすものと考えている。

⁴ 筆者は、以前、形容詞の表わす「属性」から、何らかのイベントの成立可能性を推論するという「アフォードダンスに基づく解釈」を提案した (仲本 1998)。

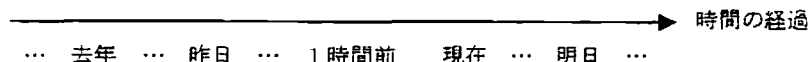
⁵ このような事態局面の表示として、森山 (1988) の「時定項分析」が参考になる。

(8) 空間化・数量化された時間表現:

- a. わたしの大学は夏休みが 長い/短い [初山 1995:634,635]
 b. 平和が訪れる日は 遠い/近い [初山 1995:629,631]
 c. 時間がなくなってしまった [山梨 1995:115]

このように、人間は一般に、「時間」を「一次元」の線的な対象と考える場合があり、以下のようなモデルとして表現される。¹⁰

(9) 一次元の時間認知モデル

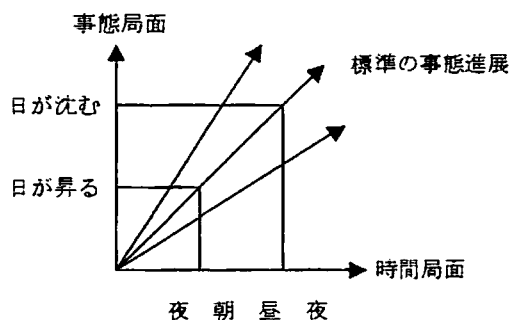


2.2. 事態進展モデル — 「二次元」の時間認知

しかし実際は、人間は、「時間の経過」を直接に知覚することは不可能で、何らかの「事態の推移 (例. 日が暮れる)」によって間接的に把握する必要がある。逆に言うと、人間は、事態の推移によって時間 (の経過) を「構成」すると言い換えられる。¹¹ここでは、このような認識論的な性質を鑑みた時間のモデルとして、Löbner (1989) の「事態進展モデル」を紹介する。¹²

次の図は、一日の太陽の運行に関する事態進展モデルである。横軸は、時間の経過にあたる「時間局面」を、縦軸は、事態の推移にあたる「事態局面」を表わす。また、座標空間上の矢印は、時間軸に沿って進展する「事態の進展」を表わす。このように、「事態進展モデル」は、事態の推移によって時間を構成するという人間の時間認知の傾向をモデル化している。

(10) 事態進展モデル: 時間局面と事態局面の相関



3. いろいろな局面形容詞

本節と次節は、時間認知を反映する形容詞の意味的分類、および、それらの事態認知モデルに基づく表示を試みる。まず、「古い」と「新しい」以外の局面形容詞の諸相を観察してみたい。特に、「二次元」の時間認知によって、はじめて理解可能な局面形容詞の存在を指摘する。

¹⁰ 初山 (1995:636) は、空間的な時間表現に対する制約として、二次元以上の空間表現である「広い・狭い」や「太い・細い」などの形容詞が、時間表現に適用できないことを指摘している。

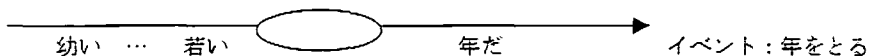
¹¹ 例えば、アリストテレスは「運動や変化がなければ、時間は存在しない」と、また、ラッセルも「時間は、経験された出来事によって構成される」と言っている。

¹² 哲学者の中島 (1996:67) も、「主観的時間 (事態局面に相当)」と「客観的時間 (時間局面に相当)」のずれの認識を解消するための類似のモデルを提案している。

3.1. 年齢を表わす形容詞 —三つの年齢局面

日本語の局面形容詞は、「古い」や「新しい」以外に、特に、ひとの「年齢」を表わす表現として、様々に語彙化されている。

- (11) a. 森先生は 年だ b. 太郎君は 幼い／若い
 (12) a. 年だ : 事態局面において、事態がより推移した段階にある
 b. 幼い／若い: 事態局面において、事態があまり推移していない段階にある
 (13) 「幼い」「若い」と「年だ」の事態局面:



しかし、一概にひとの年齢と言っても、次の三つの事態局面＝年齢局面が日本語の形容詞として取り立てられる。

- (14) いろいろな「年齢局面」:
 a. 実際年齢: 実際の年齢
 b. 精神年齢: ひとの行動から認識される年齢
 c. 外見年齢: ひとの外見から認識される年齢

例えば、「年だ」は、もっぱら実際年齢に言及するのに対し、「幼い」「若い」は、実際年齢に言及するだけでなく、精神年齢や外見年齢を焦点化する。

- (15) a. 森先生は 年だ b. ?林先生は {考え方, 体付き} が 年だ
 (16) a. 太郎君は 幼い b. 次郎君は {考え方, 体付き} が 幼い

3.2. 「事態局面」と「時間局面」のズレを表わす表現

年齢を表わす表現には、実際年齢(＝時間局面)と、精神年齢や外見年齢がずれていることを含意するものがある。例えば、「ませている」は精神年齢が実際年齢よりも進んでいることを表わし、「老けている」は、外見年齢が実際年齢よりも進んでいることを表わす。

- (17) a. 佐藤君は ませている → 精神年齢 > 実際年齢
 b. 鈴木君は 老けている → 外見年齢 > 実際年齢

このような表現は、単なる事態の進展ではなく、事態の進展が標準よりも「はやい(後述)」ことを表わすため、次のような表現は意味的に余剰的となり不自然である。

- (18) 太郎君は 早くも ≡ませている/?老けている

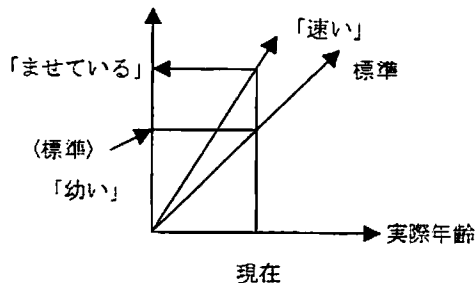
したがって、これらの表現は、以下のような二次元のモデルによって表示されなければならない。¹³ 以下の表示は、標準的な事態の進展にしたがった対象よりも、「はやい」進展にしたがった対象が、現在「ませている」「老けている」ことを表わしている。

¹³ 同様の事態は、次に述べる速度や時期を表わす形容詞によっても表わされる。
 a. 佐藤君は 成長がはやい b. 鈴木君は 成長がはやい

(19) 二つの局面のズレを表わす表現

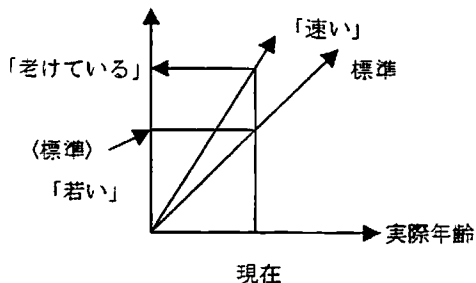
a. 「ませている」の事態進展モデル

事態局面＝精神年齢



b. 「老けている」の事態進展モデル

事態局面＝外見年齢



二つの局面のズレは、意味論的に表わされる場合もあるが、文脈によって語用論的に解釈される場合もある。例えば、局面形容詞「古い／新しい」は、多くの場合、事態推移と時間経過は相関すると解釈されるが、次のように二つの局面が相関しない文脈も考えられる。

(20) a. パソコンは すぐに古くなるb. 聖書のことばは いつまでも新しい

4. 時間認知を反映する形容詞

局面形容詞は、一般に「事態局面」上に表され時間軸に沿って理解される傾向がある。次に、その他の形容詞として、時間形容詞「早い (early) / 遅い (late)」、速度形容詞「速い (fast) / 遅い (slow)」が事態発展モデルでどのように表示されるかを見ていきたい。

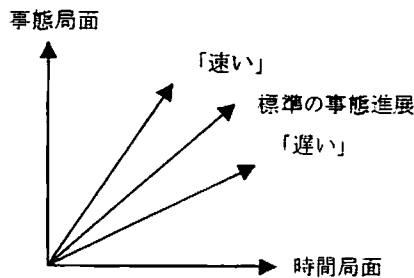
4.1. 「時間局面」に言及する局面形容詞

4.1.1. 絶対的な「位置」を表わす場合

第一に、日本語の形容詞で、「早い」と「遅い」は、時間的な「位置」¹⁴を表わす「時間局面」に言及する形容詞で、いわば、もうひとつの局面形容詞と言ってもいいだろう。これらの形容詞は、ある「状況」に関して、それが「時間局面」のどの段階にあるかを表わす。¹⁵

¹⁴ 「近い」と「遠い」は、空間的な「位置」を表わす形容詞の代表であるが、これら二つの形容詞対は、ともに「位置」を表わす形容詞として類似のスキーマを持っていると考えられる。

(28) 「速い」と「遅い」の事態進展モデル:

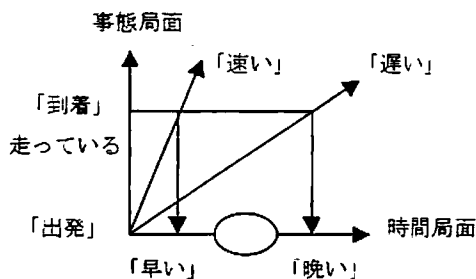


4.3. 「はやい」と「おそい」の解釈の曖昧性

さて、日本語は、事態の成立の「時期」と事態の進展の「速度」を、「はやい」と「おそい」という同じひとつの形容詞で表わす。これは、因果性という意味論的な凝集性 (coherence) に基いていると考えられる。つまり、何らかの「事態の進展」が「速い/遅い」ならば、それに関連する「事態の成立」は「早く/遅く」なる。

次の図は、うさぎとかめの「移動」の「速度」が、それぞれ速い/遅いことによって、それぞれ予想される「到着」の「時期」が早く/遅くなることを表している。

(29) 「はやい」「おそい」の事態進展モデル



「はやい」と「おそい」は、事態の「過程」を修飾する場合、その進展速度が問題になり、事態の「成立」を修飾する場合、その成立時期が問題になる。したがって、「本を読む」のような継続動詞の場合、「事態の過程」が焦点化され「速度」と解釈されるのに対して、「朝起きる」のような瞬間動詞の場合、「事態の成立」が焦点化され「時期」と解釈される。

- (30) a. 太郎君は 本を読むのが 速い/遅い : 速度解釈
 b. ?太郎君は 本を読むのが 早い/遅い : 時期解釈
 c. #次郎君は 朝起きるのが 速い/遅い : 速度解釈
 d. 次郎君は 朝起きるのが 早い/遅い : 時期解釈

ここまでで観察してきた形容詞をまとめると次のようになる。

- (31) a. 局面形容詞: 「事態局面」に表示される 例) 古い、新しい
 b. 時間形容詞: 「時間局面」に表示される 例) 早い、遅い
 c. 速度形容詞: 「事態進展」の傾きとして表示される 例) 速い、遅い

5. 語用論的な局面解釈

最後に、意味論的に規定した「局面形容詞」の概念を拡張して、特定の文脈において、形容詞は、一般に、語用論的に「局面」として解釈されるという言語現象を取り上げ、このような解釈を成立させる条件について議論する。

5.1. 「局面解釈」とは何か？

「青空」と「青葉」。これら二つの表現は、異なる時間の流れを持っている。「空」は、雲がないかぎり、つねに「青」という属性を持っている。そこに時間の流れは感じられない。これに対し、「葉」は、春とともに芽吹き、秋になると紅葉し、やがて冬とともに枯れて散っていく。

次の例で、形容詞「青い」や「甘い」は、「属性」ではなく一時的な「状態」を表わし、それぞれ「蜜柑が熟れる」や「考えが練れる」等の事態の一局面として解釈される。

- (32) a. この蜜柑は青いね。もう少し待ってみるか。
b. その考えは甘いね。もう少し考えてごらん。

本稿では、このように、形容詞が、語用論的な文脈によって、何らかの事態の一局面として解釈されることを形容詞の「局面解釈」と呼ぶことにする。以下では、このような「局面解釈」を誘引する言語事実として、「もう」や「まだ」のような「局面副詞」の修飾による、「解釈の強要 (coercion)」という現象を観察する。

5.2. 局面副詞「もう」と「まだ」－局面形容詞との共起関係

局面副詞「もう」と「まだ」は、事態を二つ（あるいは三つ）に分け、ある状態がその二つのうち、どちらの局面にあるかを取り立てる (Nakamoto 1996)。これらの副詞は、意味的に、

(33) のように定義され、(34) のように表示される。¹⁷

- (33) a. 「もう」：事態局面や時間局面において、より進んだ局面にあること
b. 「まだ」：事態局面や時間局面において、より遅れた局面にあること
(34) 「もう」と「まだ」の事態局面／時間局面：



局面副詞「もう」と「まだ」は、本稿で取り上げた局面形容詞と、次のような、意味論的な共起関係を持つ (Lobner 1987: 181-2)。¹⁸

- (35) a. {?まだ／もう} 古い b. {まだ／?もう} 新しい
(36) a. {まだ／?もう} 早い b. {?まだ／もう} 晚い
(37) a. {?まだ／もう} 年だ b. {まだ／?もう} 幼い／若い

¹⁷ 「もう」と「まだ」は、次のように、その他に、「速度」や「時期」に言及する用法もあるが、ここでは議論上で関連性を持たないため省略した。多くの場合、副詞にストレスを置いて表現される。

a. 十分に もう 読み終えた → 「はやくも」と言い換え可能
b. 5時に もう 起きている → 「はやくも」と言い換え可能

¹⁸ 同様なことは、状態化された動詞についても言える。

a. この魚は [まだ／?もう] 生きている b. この魚は [?まだ／もう] 死んでいる

5.3. 局面解釈の諸相 — 「可逆性」と「不可逆性」

この節では、具体的に、どのようなクラスの形容詞が、どのような語用論的な文脈で「局面解釈」を誘因するかについて議論してみたい。

5.3.1. 可逆的事態の局面解釈

意味的に単なる一時的な「状態」を表わす「元氣だ」のような形容詞は、「もう」と「まだ」のどちらの局面としても取り立て可能である。¹⁹ 次の例で、「元氣だ」は、「もう」で修飾した場合、「回復」という出来事が喚起され、以前は病氣だったが、今は治っていると解釈される。これに対して、「まだ」で修飾した場合、「衰弱」という出来事が喚起され、将来は体が衰える（可能性がある）が今のところ大丈夫であると解釈される。

- (38) a. おとうさんは もう 元氣だ b. おじいさんは まだ 元氣だ

5.3.2. 不可逆的事態の局面解釈

次に、空間的なサイズを表わす「大きい」や「小さい」等の形容詞は、局面副詞が付加されたとき、「成長」という出来事が喚起され、解釈の自然さに非対称性が生じる。これは、こどもは「大きくなる」ことはあっても、「小さくなる」ことはない（不可逆性）ためであろう。²⁰

- (39) a. うちの子は まだ小さい／もう大きい
b. ?うちの子は まだ大きい／もう小さい

5.3.3. 局面解釈をゆるさない場合

最後に、局面副詞を付加しても局面解釈が困難な形容詞もある。このような形容詞は、形式意味論で「個体レベル」の述語と呼ばれ、恒常的な「属性」と解釈される傾向がある。次の例も、「鉛筆の色」「人の知力」は一般に変わらない（不変性）ため、解釈が困難となっている。²¹

- (40) a. ?この鉛筆は {まだ／もう} 赤い
b. ?あのひとは {まだ／もう} 賢い

5.4. 局面解釈の成立条件 — イベントフレームの喚起

局面解釈は、局面副詞を付加することによって「強要される」場合が多いが、基本的には、次のような解釈上の処理を必要とする。例えば、(38) (39a) では、「回復」「衰弱」「成長 (= 大きくなる)」などのイベントフレームが喚起されて局面解釈が成立する。これに対して、(39b) や (40) は適切なイベントフレームを喚起しないため局面解釈が困難となっている。

(41) 局面解釈の成立条件：

主語名詞や形容詞の組合せから、何らかのイベントフレーム²²が喚起される

¹⁹ 次のような周期的事態に言及する場合はどちらの局面でも解釈可能である。

a. 外は {まだ／もう} 明るい／暗い b. 外は {まだ／もう} 暖かい／涼しい

²⁰ 解釈不能というわけではなく、からだは成長することによって、相対的に衣服が小さくなるという文脈のもとで、「うちの子 (に) は、まだ大きい／もう小さい」ということがあるかもしれない。

²¹ これも同様に語用論的な問題で、適切な文脈を与えると何らかの解釈は可能となる。

²² イベントフレーム (event frame) については、Talmy (1995)、仲本 (1998) を参照。また、フレーム (frame) については、Fillmore (1982) を参照のこと。

このような処理を以下のように定式化する。(42)は、「Xの状態をイベントの一局面として位置づける」ことを表わす。また、局面の種類としては、「まだ」と共起する「後進局面」と、「もう」と共起する「先進局面」があり、(43)のように表示される。形容詞は一般に、対義語として、二項対立を構成するものが多く、このどちらかの局面として解釈される傾向がある。²³

(42) 状態 (X) ⇒ 局面 (イベント (X))²⁴

(43) 「もう」と「まだ」による局面解釈の強制 (Coercion):

- a. 「もう」の局面解釈: 状態 (X) ⇒ 先進局面 (イベント (X))
- b. 「まだ」の局面解釈: 状態 (X) ⇒ 後進局面 (イベント (X))

6. 本稿のまとめ

本稿は、まず、従来の「状態」対「属性」という区分とは異なる、形容詞のイベント構造として事態の一局面に言及する「局面形容詞」というカテゴリーを提案した。次に、時間認知を反映する様々な形容詞の解釈において、時間経過と事態推移の相関に基づく「二次元」のモデルが必要であることを主張した。最後に、局面副詞「もう・まだ」の付加による解釈の強要を取り上げ、語用論的な「局面解釈」に対するイベントフレームの必要性を示した。

参考文献

- 荒正子 1989. 「形容詞の意味的なタイプ」, 『ことばの科学 3』, pp.147-162, 東京: むぎ書房.
- Comrie, Bernard 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Croft, William 1991. *Syntactic Categories and Grammatical Relations - The Cognitive Organization of Information*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Cruse, Alan D. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fauconnier, Gilles 1985. *Mental Spaces*. Cambridge: The MIT Press. [坂原茂 他 (訳) 『メンタル・スペース - 自然言語理解の認知インターフェイス』, 東京: 白水社, 1987]
- Ferris, Connor 1991. "Time Reference in English Adjectives and Separative Qualification," *Linguistics*, Vol.29, pp.569-590.
- Fillmore, Charles J. 1982. "Frame Semantics," In The Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, pp. 111-137, Seoul: Hanshin.
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi & Friederike Hännemeyer 1991. "From Cognition to Grammar - Evidence from African Languages." In E.C.Traugott & B.Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization Vol.1*, pp.149-187, Amsterdam: John Benjamins.
- 飛田良文, 浅田秀子 1991. 『現代形容詞用法辞典』, 東京: 東京堂出版.
- 井筒勝信 1999. 「局面の概念化様式」, 第2回認知言語学フォーラム発表資料.
- Lakoff, George & Mark Johnson 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press. [渡辺昇一他 (訳) 『レトリックと人生』, 東京: 大修館書店, 1986]

²³ この問題については、個々の形容詞に関して、「対義関係」に基づく語彙意味論的な詳しい分析が必要となる (Cruse 1986 参照)。今後の課題としたい。

²⁴ 「アフォーダンスに基づく解釈 (仲本 1998b)」では、属性とイベントは「原因と結果」という関係を持っていたが、局面解釈では、状態とイベントは「部分と全体」という関係にある。

- Löbner, Sebastian 1987. "German *Schon - Erst - Noch*: An Integrative Analysis," *Linguistics and Philosophy*, Vol.12, pp.167-212.
- 榑山洋介 1995.「多義語のプロトタイプの意味の認定方法と実際・意味転用の一方向性：空間から時間へ」,『東京大学言語学論集』, No.14, pp.621-39.
- 森田良行 1988.『基礎日本語辞典』, 東京: 角川書店.
- 森山卓郎 1984.『日本語動詞述語文の研究』, pp.198-224, 東京: 明治書院.
- 中島義道 1996.『時間を哲学する - 過去はどこへ行ったのか』, 東京: 講談社現代新書.
- Nakamoto, Koichiro 1996. *A Study of Temporal Adverbs: Their Temporal and Non-temporal Uses*. M.A. Thesis, Sophia University.
- 仲本康一郎 1999.「攻撃力と抵抗力を表わす形容詞 - 主体性という概念をめぐる」,『関西言語学会プロシーディング』, No. 23, pp.10-20.
- 仲本康一郎 1998.「アフォーダンスに基づく発証解釈 - 力学形容詞はなぜ行為の難易度を表わすのか」,『日本語用論学会予稿集』, No.1, pp.2-9.
- 中森肇 1976.『時間と人間』, 東京: 講談社現代新書.
- 西山佑司 1988.「指示的名詞句と非指示的名詞句」,『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』, No.20, pp.113-134.
- Pustejovsky, James 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge: The MIT Press.
- 坂原茂 1990.「役割と解釈の多様性」,『フランス文化の中心と周縁 (特定研究報告書)』 pp.107-123. 大阪外国語大学フランス研究会.
- Talmy, Leonard 1995. "The Windowing of Attention in Language," In M. Shibatani & S. Thompson (eds.), *Grammatical Constructions: Their Form and Meaning*, pp.235-287. Oxford: Oxford University Press.
- Taylor, John.R. 1992. "Old Problems: Adjectives in Cognitive Grammar," *Cognitive Linguistics* Vol.3, No.1, pp.1-35.
- 寺村秀夫 1984.『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』, 東京: くろしお出版.
- 山梨正明 1995.『認知文法論』, 東京: ひつじ書房.

言語科学論集（第 5 号）

1999年12月

編集・発行 京都大学 総合人間学部
基礎科学科 情報科学講座

印刷者 中西印刷株式会社
602-8048 京都市上京区下立売小川東入

Papers in Linguistic Science, No.5

December, 1999

Department of Basic Science

Kyoto University

Yoshida, Sakyo-ku, Kyoto

606-8501 JAPAN

©1999 京都大学 総合人間学部 基礎科学科